

本人直撃!

気になる本を
書いたのはこの人↓



吉田太一

1964年、大阪府生まれ。28歳で軽トラックからひとりで引越運送業を始め、その後、日本初の「引越屋のリサイクルショップ」を開業。02年、遺品整理のサポートに対する必要性を感じ、「天国へのお引越し」をキャッチフレーズに日本初の遺品整理専門会社『キーパーズ』を設立。最近では孤独死を防ぐための活動も積極的に行なっている

撮影／高橋定敬

孤独死つて、老人だけのモノじやないんです！

「遺品整理」というサービスはこれまで誰も手がけてこなかつた分野。死臭処理の問題や費用負担の争いに巻き込まれるなど、いろいろ苦労もあつたのでは？

「でも、こんなに感謝されるサービスはないですよ。薬にもすがりたい人の薬になつて、さらに下からも支えてあげるような仕事だと思つています」

——自殺や孤独死の現場にも数多く立ち会つていらつしやるそうですが。

「自殺は少なくとも年間100件以上。また、死後すぐに発見されなかつた『変死』も年間数百件はあります。この本を読んだみなさんにも、『もし自分が死んで、1週間、2週間と誰にも発見されなかつたら…』と考えてみてほしい。誰もあの世から自分のそんな姿は見たくないんじゃないでしょうか」

非常に多いんです。世間は高齢者には優しいですが、この年代は誰にも気にされない。現在20代～30代の「引きこもり」と呼ばれる人たちも、このままでは孤独死の予備軍になつてしまふのではないかと危惧しています」

——では、孤独死を減らしていくにはどうしたらよいのでしょうか？

「とにかく、他者とのコミュニケーションを意識づけてもらうしかない。傾向として、孤独死された方の部屋は家電製品が壊れたまま、修理されていないケースが多いんです。おそらく、テレビも自分も一緒で、壊れても直さない…。生きていくこと、つまり、現状を維持しようとする気持ちがなくなつてしまつてはいるのかもしれません。そ

うなると他者との関わりも希薄になります。もし今、親や親しかった友人と連絡を途絶えさせているなら、これをきっかけに一度、連絡してみてほしい。ほとんどの場合、お互いに意地を突張つているだけで、心から憎しみ合つてゐるわけじゃないと思うんです」

——若者は、自分の親に置き換えてみるといや、孤独死は決して老人だけの問題じゃありません。実は今、40～50代の『独居中年、独居壮年』の孤独死が

遺品整理屋は見た!!
天国へのお引越しのお手伝い

Taichi Yoshida

『遺品整理屋は見た!!
天国へのお引越しのお手伝い』

扶桑社 1260円

最近、隣人と顔を合わせたのは、いつ？ 孤独死、身内の自殺、貰の遺産問題…など絶対的な34のエピソードに加え、「死体は語る」の著者・上野正彦氏との対談も収録。今夏、フジテレビ系列でドラマ化決定！